

これまでの取り組みの中で見えてきた成果

支援の結果、認知症にかかる必要な支援に結びついていなかった人を発見し、支援終了者の85%以上が在宅生活継続となった

支援対象者の43%（H26は54%）がひとり暮らし世帯であった

アウトリーチ手法を用いた本チームの取り組みが、ひとり暮らし高齢者対策に有効である可能性が示唆される

支援対象者の約1割が発見が困難で対応が遅れがちとなる傾向の強い若年性認知症の方であった

事業開始当初は関係諸機関からの相談が多かったが、経過とともに家族や地域関係機関からの相談が増加した

潜在する認知症の方の把握・発見には、地域住民への効果的・継続的な広報が必要

事業の推進のためには、地域で築いてきた連携の基盤を活かし、顔の見える関係の中で取り組むことが最も効果的・効率的

認知症サポート医がチーム員医師としてチームに参画し活動することで、地域の中での認知症サポート医の役割が明確になってきた

支援対象者に対する認知症専門医療機関への受診勧奨がスムーズに行える

地域の医師、地区医師会との協力により、かかりつけ医や地域の医療機関との連携がスムーズに行える